

MUSEUM

EYES

2005Summer

ミュージアム・アイズ

Vol.

41

Mm
MEIJI UNIVERSITY
MUSEUM

● 特集

東京都埋蔵文化財センター・明治大学博物館 共催

特別展『江戸大名屋敷を発掘する。』

2005年7月27日(水)～8月26日(金)



尾張藩上屋敷跡遺跡
第12地点出土鬼瓦
(写真:東京都教育委員会提供)

- ◎杉原重夫新館長 就任あいさつ
- ◎2004年度来館者 3万人達成!!
- ◎ビクター・ハリス氏 (大英博物館前日本部長) インタビュー
- ◎収蔵室から (萩焼)
- ◎来た・見た・聞いた明治大学博物館
- ◎博物館友の会から
友の会分科会①・石器文化研究会

明治大学博物館

特別展

『江戸大名屋敷を発掘する。』 が開催されます!!

【会 期】7月27日(水)～8月26日(金) (土日開館 ただし8月10日～16日は休館)

【主 催】東京都埋蔵文化財センター・明治大学博物館

【入 場】無料

❖尾張藩上屋敷跡遺跡(新宿区)

防衛庁の庁舎が集中する新宿区市谷本村町に位置し、明暦4年(万治元年、1658年)から幕末まで存続しました。大名の上屋敷は大名個人の邸宅であると同時に、藩の出先機関の役割もまた持っていました。同遺跡から出土した多くの茶碗類は、そこで働いていた多くの藩士たちの生活ぶりを想像させます。

こうした土器のほかに御殿の礎石や排水溝に使われた石材、屋根に葺く瓦が大量に出土しました。格式や体面を重んじた当時の武家社会では、屋敷構えが非常に重要でした。上屋敷を造営する際、いかに多くの労働力と資金が投入されていたかを物語っています。



尾張藩上屋敷遺跡出土 柳茶碗

❖宇和島藩伊達家屋敷跡遺跡(港区)

港区六本木7丁目の、(仮称)ナショナルギャラリー等の建設に先立ち発掘調査が行われました。この宇和島藩伊達家屋敷は、明暦元年(1655年)以来200年間使用され、敷地は約3.2万坪にも及んだかなり広大なものであったとされています。屋敷内には、安政6年(1859年)の大火災後に行われた復旧工事に伴うと考えられる巨大な土壇があり、その埋土中からは焼土や焼けた瓦とともに5万点にも及ぶ遺物が出土しました。

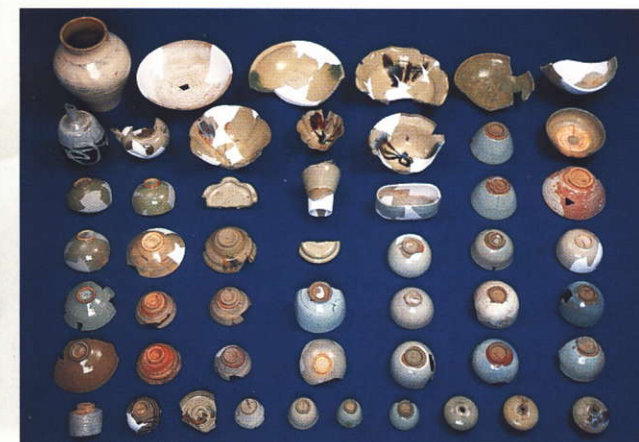
出土した陶磁器類には、優品とされる鍋島藩窯の製品が多く含まれていました。宇和島藩伊達家と佐賀藩鍋島家は姻戚関係にありましたが、出土遺物からもその関係の深さが窺えます。



宇和島藩伊達家屋敷遺跡出土 碗・皿類

❖萩藩毛利家屋敷跡遺跡(港区)

港区赤坂9丁目の旧防衛庁敷地内に位置した萩藩毛利家の下屋敷です。通常、藩主は上屋敷に居住しますが、萩藩毛利家では下屋敷としては珍しく藩主がたびたび居住していたため、上屋敷よりも中心的な役割を担いました。この遺跡では、やはり萩焼がまとまって出土し、なかには、肥前や京焼をまねたものも多くみられることがわかりました。この下屋敷は、幕末の長州征伐に際し幕府によって包囲され、取り壊しにあう運命となりましたが、敷地内で見つかった約13万点もの陶磁器を廃棄した巨大な穴は、激しい動乱期の様子を物語っています。



萩藩毛利家屋敷跡出土 萩焼

❖丸の内三丁目遺跡(千代田区)

この遺跡は旧都庁の敷地内に位置し、国際フォーラム建設に伴い、1992年に調査された大名屋敷街の遺跡です。

この地点はのちに「大名小路」と呼ばれ、旗本や外様大名の屋敷が造営されました。6～7家が常に屋敷を構えており、慶長13年(1608年)頃の記録によると、彦坂小判部元正(幕府代官)・福島高晴(大和国松山城主)・青山五郎八(旗本)・竹中重利(豊後国府内城主)・森(毛利)高政(豊後国佐伯城主)・山内一豊(土佐国高知城主)などの名がみられます。

6家による敷地割は長い時期続き、明暦3年(1657年)に起こった江戸市中の6割を焼いた「振袖火事」という大火を経ても変化がありませんでした。その後、元禄11年(1698年)の「勅額火事」という大火により付近一帯が焼け、土佐山内家と蜂須賀家の2家が敷地を大きく二分することになり、土佐山内家の屋敷だけが、幕末まで存続していきます。

出土遺物は大名屋敷という性格上、陶器の優品が多く、舶来の天目茶碗や、朝鮮産の可能性のある「仁清」銘のある碗、初期織部などさまざまなものがあります。

※このほか、平戸藩松浦家の向柳原町遺跡(台東区)出土遺物が展示されます。

(写真は東京都教育委員会提供)

明治大学では、リバティータワー建設に伴う発掘調査で中坊家を中心とする旗本屋敷の遺跡が発見されており(記念館前遺跡)、陶磁器・漆器・木製品をはじめ、櫛・銭貨・ゲタ・羽子板・ままごと道具まで当時の生活を彷彿とさせる多彩な遺物が出土しています。その一部を、明治大学博物館1階ロビーの導入展示で公開中です。また、秋には刑事部門が所蔵する内藤家文書を中心とした展示も開催されます。そちらもあわせ、ぜひこの機会に江戸時代の世界を体験してください。

予告

2005年度明治大学博物館特別展

「江戸時代の大名～日向国延岡藩内藤家文書の世界～」

譜代藩史料の白眉と謳われる「日向国延岡藩内藤家文書」と天下一能面などの内藤家の宝物による歴史の玉手箱

【会 期】10月15日(土)～12月11日(日) (土日開館)

【主 催】明治大学博物館 延岡市教育委員会

【入 場】300円(明大生、教職員、博物館友の会、リバティ・アカデミー会員、明大カード会員、高校生以下は無料)





[館長] 杉原重夫

杉原 重夫(すぎはら しげお)
明治大学文学部史学地理学科教授。自然地理学を専門とする。1941年生まれ。テフクロノロジー(火山灰編年学)の方法による日本及び世界の第四紀における火山の噴火史と平野地形の発達史を研究。なお、文化財資料の理化学的分析も担当している。

明治大学における生涯教育の拠点であるアカデミーコモン竣工とともに開館した明治大学博物館も、開館1年を経過しました。私は、このオープン2年目の4月に、新たに博物館長に着任することになりました。専門分野は前館長の小崎 尚先生と同じ自然地理学です。私は野外調査によって、火山や平野の生い立ちを明らかにする研究を行っていますが、最近では先史・歴史時代の火山噴火に興味があります。また、石器時代に槍先やナイフとして利用された、あの玻璃光沢のある黒曜石が、どのような火山活動で出来るのかについて

も、関心があります。考古学とはまた違った角度から、私も当時の人々が使用した黒曜石の産産地を調べることのお手伝いが出来るかもしれません。さて、ご存知のように、当博物館は考古、刑事、商品の3つの旧博物館が統合して開設されました。その点から見れば、博物館には50年の歴史があります。この長い歴史の間に蓄積されてきた展示品の数々もさることながら、当博物館は設備が整った立派な収蔵庫を備えております。博物館が学内における教育・研究の拠点であることはもちろん、生涯教育の場としても学外に広く利用される

ことを願います。また、本年度の秋の特別展では「江戸時代の大名一日向国延岡藩内藤家の文書の世界」の行事を行う予定で、内藤家に伝わる文書のほか鎧・兜・能面などの大名道具が展示されます。さらに、この特別展にあわせて、能舞台を実際にご覧頂く企画や、展示内容に関連した公開講座もありますので、ぜひご期待下さい。明治大学博物館は、これからも新機軸を考えて、「大学の顔」としての役割を果たすよう、学芸員、職員の方々とともに頑張りますので、よろしくお願い致します。

Thanks

—ありがとうございます— 御来館者3万人達成!!



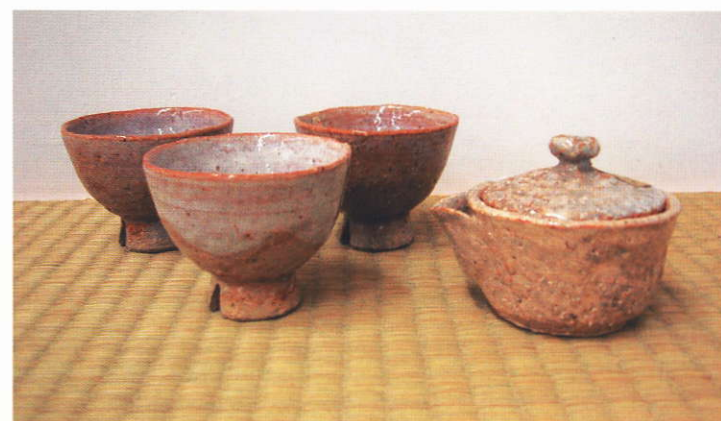
■幸運にも3万人目の入館者となった、都内高校生グループの4名

新博物館開館からの常設展入館者が3月2日に3万人に達しました。幸運にも3万人目の入館者となったのは、都内の高校生グループ4名です。博物館職員総出で出迎えをし、博物館から記念品を贈呈いたしました。また、「来館者3万人予想クイズ」で見事予想が的中した方にも、記念品を贈呈いたしました。100名近い方にご応募いただき

ましたが、見事予想が的中したのは、1名でした。2004年10月から2005年12月までと、幅広い予想があり、最も多かった予想は2005年2月でした。また、2004年度の最終的な来館者数は、特別展等を含めて45,077人に達しました。多くの方にご来館いただき、まことにありがとうございます。今後とも応援をよろしくお願いいたします。

萩焼

H A G I Y A K I



■萩焼 煎茶器



■萩焼 水差し

茶の湯茶碗を品定めするのに「二葉、三唐津」と言われるように、萩焼は早くから茶人に珍重されてきました。萩焼の起源は四百年前にさかのぼります。豊臣秀吉の文禄・慶長の役(二五九二―二五九八)は、別名やきもの戦争とも呼ばれ、出征した戦国大名が多く、陶工を連れ帰り、日本に窯を起すことになりました。尊徳による上野焼(細川忠興)、八山の高取焼(黒田長政)、金海・朴平意による薩摩焼(島津義弘)、そして、李幻光・李敬による萩焼(毛利輝元)等です。

李幻光は、毛利輝元が萩に入府するに際し、松本村中之倉(現萩市椿東)に開窯し、「御用焼物所」と称して、いわゆる松本焼の礎を築きました。李幻光の死後、弟の李敬が後を継いで「坂高麗左衛門」と称し、現在に至るまで代々「坂高麗左衛門」を名乗っています。

なお、別系として、李幻光の孫の山村平四郎光俊が始めた深川焼、三輪休雪が始めた三輪窯、林半六らの系統があり、いずれも萩焼に含まれます。萩焼の大きな特徴は焼きあがりの土の柔らかさとその吸水性にあります。これは、山口県防府

市から産する大道土という耐火度の高い土を主に用い、比較的低い焼成温度(約千二百度)で火を止めるため、土があまり焼き締まらないためです。このため、萩焼を長く使用すると、製品に水分等が浸みこみやすく、使用しているうちに素地の色彩が変化します。このことを、「萩の七化け」と呼び、人々はその味わい深い変化を楽しんでいました。また、器肌のほんのりとしたあたたかみを大切にしている萩焼は、透明釉と白濁する薬灰釉による施釉がほとんどで、絵付けなどの装飾が見られないのも特徴です。その代わり、高台に切れ目をつける「切り高台」、高台を十字に割る「割り高台」など高台の形に工夫があります。

李朝の高麗茶碗をルーツとし、抹茶茶碗や茶入れ等の茶陶を中心に作られてきた萩焼。明治には、廃藩置県により萩藩の保護を失い、大正から昭和前期にかけては多くの窯が廃業しましたが、萩焼初の人間国宝となった十代三輪休雪らの努力により、活気を取り戻し、現在は、百軒以上の窯元で、新しい感覚の食器なども作られています。

(吉田賢治)

ビクター・ハリス氏にきく —博物館と日本文化研究—

大英博物館で日本部長を務められたビクター・ハリス氏が、2005年4月から客員教授として明治大学に滞在しています。各地へ講演に飛び回る毎日で非常に多忙ななか、お時間をいただいて明治大学博物館の印象や大英博物館での展示経験、ご自身の研究などについてうかがいました。

ビクター・ハリス Victor Harris

1942年、ロンドン生まれ。エセックス・パーミンガム大学バークロフト校で学び、1977～2003年まで大英博物館に勤務。イギリスにおける日本文化研究の第一人者で、特に日本刀をはじめとする中・近世の文化を専門とする。日本の滞在歴は長く、日本語も堪能。また、剣道にも通じ、ヨーロッパ剣道連合会長、国際剣道連合副会長を歴任した。



Interview

◆明治大学博物館について

—明治大学博物館の印象はいかがですか？

明治大学の独自性が非常によく表れていると思います。刑事部門にあるような展示は、日本ではほかにはないものですね。また、考古部門も良いものが展示されています。全体に、陳列方法も工夫されていますし、解説が生き生きとしていて、情報もコンテンツもすばらしいと思います。大きさも気楽に歩けるちょうど良い広さですね。

◆大英博物館で手がけた展示について

—大英博物館では、どのような展示をされたんですか？

当初、日本の展示コーナーは狭くてケースも小さく、温湿度の環境も良くなかったので展示の制約が非常に大きかった。それで資金を集めて15年ほど前に日本館を新設したんです。おかげで、大きな屏風なども展示できるようになりました。1年のうちに館蔵品を中心とした展示を2回と、特別展を1回行っています。館蔵品は縄文から現代のものまでありますが、柿右衛門をはじめとした江戸の初期や明治の有田焼などを展示しました。特別展で私が最初に手がけたのは、1990年の「Swords of the Samurai(サムライの刀)」ですね。日本からすばらしい刀を持ってきました。また、2001年には、「Shinto, The Sacred Art of Ancient Japan(神道:日本古代の宗教美術)」展を行いました。曼荼羅や神像をはじめ、神道の源を探るという意味で古墳、弥生、縄文時代のものも展示しました。この顔壺(編集注:当館蔵の出流原遺跡出土・顔面付壺形土器)も、お借りしました。

—そのなかで、最も印象深かった展示は何ですか？

1991年の、「Kamakura, The Renaissance of Japanese Sculpture(鎌倉:日本彫刻のルネッサンス)」です。これは、文化庁と行った特別大きな展覧会でした。運慶・快慶の典型作や越前の3m近い仁王など、国宝・重要文化財級のもののまで60体近くを日本から運んで展示しました。大きなものは厳重に梱包して飛行機で輸送しました。船よりも安全なんですよ。あと、仏像をお借りした町から、多くの方がロンドンまで来て下さったんです。30名も。

◆日本文化の研究について

—では、最後にご自身の研究についてお聞かせ下さい。

日本刀の研究をしています。また、そうしたモノから生まれる美意識と日本人の心についても。たとえば、日本刀や釉をかけた焼き物などは、美しさがありますよね。作ろうとは思わなかったけれども、自然とそうした美が生まれる。それは神様からのプレゼントとして感謝するんです。沢庵和尚や山岡鉄舟がいうように、剣術には妙剣や絶妙剣といった段階があるけれども、道を極めることによって理屈や理論を超えた領域へ達することができるのであり、自然というものを忘れないでものごとに相対することが鍵になるのです。そうしたものが、日本の心の原点ではないかと考えています。

—ありがとうございました。

メディア掲載一覧

資料写真掲載

- 資料掲載【壺形土器と人骨(千葉県天神前遺跡)】『先史日本を復元する』4「稲作伝来」 岩波書店
- 資料掲載【突棒】【刺叉】【袖搦】【江戸町同心捕物出役長十手】【江戸町奉行所同心真鍮銀流し十手】『徳川幕府刑事図譜』『はしご捕りの図』『密命』読本 編集館
- 資料掲載【充真院旅日記『五十三次ねむりの合の手』】『菓子文化誌』 河原書店
- 資料掲載【黒川真頼旧蔵本「御定書百箇条」(表紙)】『徳川幕府揭示図譜』『旧江戸伝馬町牢獄門前之景』『入墨の図』『磔刑の図』『江戸の盗賊』 青春出版社
- 資料掲載【「鑑札 京都松前物仲問鑑札」(嘉永7年)】『名探偵コナン推理ファイル 日本史の謎④』 小学館
- 資料掲載【石砲丁(京都府深草遺跡)】【深鉢形土器(栃木県篠山貝塚)】『社会テスト6年1学期』 正進社
- 資料掲載【遮光器土偶(青森県亀ヶ岡遺跡)】『ボビー社会6年』4月号 新学社
- 資料掲載【「刑罪大秘録」『引廻行列』】『新編 嶋村の歴史と生活』第1集 東の歴史と生活を掘りおこす会
- 資料掲載【石砲丁(京都府深草遺跡)】『社会科テスト6年生』 青葉出版
- 資料掲載【骨角製釣針(神奈川県夏島貝塚出土)】【縄文早期の土器(北海道尾駈遺跡出土)】『スーパーワイド社会科資料集 6年』 教育同人社
- 資料掲載【片刃礫斧(神奈川県夏島貝塚)】シリーズ「佐原真の仕事」第2巻『道具の考古学』 岩波書店
- 資料掲載【「有馬家中延岡城下屋敷並絵図」】『よみがえる日本の城18 鹿児島城・首里城』 学習研究社
- 資料掲載【群馬県岩宿遺跡の発掘風景】『フェネック』2005年6月号 三推社
- 資料掲載【「時世のほり風」】『別冊歴史読本 幕末の長州』(仮題) 新人物往来社
- 資料掲載【「会津若松戦争之図」】『週刊 日本の合戦』第9号「松平容保と会津戦争」 講談社



石砲丁(京都府深草遺跡)



『徳川幕府刑事図譜』『はしご捕りの図』

館紹介等の取材・撮影・掲載(新聞・雑誌)

- ◇掲載【明治大学博物館】『日本経済新聞』日本経済新聞社 2004年12月10日
- ◇掲載【明治大学博物館】『日経ブランディング』 日本経済新聞社
- ◇掲載【明治大学博物館】『週刊朝日』『お散歩レストラン』 朝日新聞社
- ◇掲載【明治大学博物館】『砥粒加工学会誌』49巻5号「博物館だより」(社)砥粒加工学会

団体見学の記録 2005年3月～2005年5月

- 【一般】 読売日本テレビ文化センター(5名)／たつみ会(50名)／金沢大学拡充整備促進協議会(4名)／千葉市立加曽利貝塚博物館友の会(17名)
- 【小・中学校】 栗原市立若柳中学校(5名)／お茶の水小学校体験学習(48名)／加美町立新田中学校(6名)／静岡県長泉町立北中学校(7名)／弥富町立弥富中学校(3名)
- 【大学・大学院】 明治大学文学部「日本文学講義」3年生(26名)

博物館
友の会から友の会分科会①
“石器文化研究会”

猿が猿人に進化をとげ、ホモ・ハビルスに至り、人類初の加工された石器を作り出したのが、今からおよそ270万年前。原人は脳の発達や経験を経て、人類初の生活道具を石によって作り出しました。その後、人類は、生、死、絶滅を繰り返しながら世界の各地へ拡散し、用途別の新しい石器を作り出していきました。それらの石器は、主人を失い、土中深く忘却の彼方へ置き去りにされましたが、我々はその残り香を求めて、石器へのロマンを語り合っております。

会の名称が石器文化研究会などと堅苦しい感じがしますが、研究などとはおこがしく、石器にロマンを求める爺さま、婆さま(これは失礼)の集いです。今さら膨大な資料や研究書を読破実践するのは上台無理な話で、我々は楽しみながら石器の追っかけを続けたいと思っております。会では、旧石器から古墳時代までの石器の変化をそれぞれの時代毎に出来るだけ、文章よりも図版や写真などでビジュアル的に研究することを重視しています。主な活動を紹介すると、多摩川の河原でピクニックを兼ねて実際に石器作りの体験をしたり、遺跡・博物館の見学や、島田学芸員による指導をうけ、石器実測図の実習などを行っています。現在は、石斧をテーマに発達過程や種類、用途など時代を追って検証を行っています。

会の名称には2つの意味あいが含まれ、石器だけを起点とする研究と、石器文化時代の全般を研究するものとがあり、現時点では前者を主に検証しております。いずれテーマが枯渇した時、後者へ自然に移行していくでしょうが、焦らず、ゆっくと楽しく会を継続させていけたらと思います。毎月最終金曜日、博物館会議室にて10時～12時まで開催しております。同好の志はご一報を。

(石器文化研究会 小松忠史)

【博物館友の会 連絡先】

〒101-8301 千代田区神田駿河台1-1
明治大学博物館 友の会宛

博物館案内

【開館情報】

開館時間 10:00～16:30 (入館16:00まで)

休館日 8/27・28日
夏期休業日(8/10～8/16)
冬季休業日(12/26～1/7)

※開館時間・休館日には変更場合があります。

観覧料 常設展無料
特別展は有料の場合があります。

【図書室ご利用案内】

開室時間 月・金 10:00～18:30
(8、9、2、3月は10:00～16:30)
火～木 10:00～16:30
土 10:00～12:30

閉室日 日曜・祝日・大学が定める休日

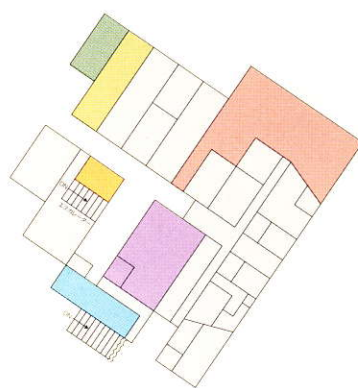
※図書室はどなたでもご利用いただけます。

※蔵書は原則閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



■交通機関

JR御茶ノ水駅(中央線)から徒歩5分
地下鉄御茶ノ水駅(丸の内線)から徒歩8分
地下鉄新御茶ノ水駅(千代田線)から徒歩8分
地下鉄神保町駅(都営新宿線・半蔵門線)から徒歩10分



施設案内(B1)

図書室
体験学習室
博物館教室
ミュージアム・ショップ
特別展示室
大学史展示室